

中国地主経済封建制度論綱（Ⅱ）

王 亜 南 著
 奥 田 秋 夫 監訳
 片 岡 幸 雄 訳

目 次

- 一 序論 封建制の基礎としての領主経済と地主経済
- 二 中国地主経済の封建形態形成とその変遷
- 三 地主経済と中央集権的官僚政治（以上前号）
- 四 地主経済と天道観念の政治思想（以下本号）
- 五 地主経済と民族発生の問題
- 六 地主経済と中国社会の長期停滞の問題
- 七 「アジア的生産様式」と地主経済形態におけるその歴史的展開
 （以下次号以降）
- 八 西周における領主経済封建社会の形成と地主経済封建社会に受け継が
 れた「アジア的生産様式」の諸特徴

四 地主経済と天道観念の政治思想

社会の意識形態は、経済関係あるいは生産関係の観念上における反映である。領主経済を基礎とする封建的統治は、一般にピラミッド型のランクづけされた身分制度的特徴、いささかの流動性、融通性もないような固定的な秩序であるという特徴、さらに領域の範囲が狭く、おくれた閉鎖的郷土関係にあるという特徴をもったものとして顕われる。これらはすべて、鬼神迷信を利用して、人民を愚弄するような、あるいはまた「神教を誕敷す」といったようなことの温床となったのである。領主経済が地主経済に

移っていった時点で、社会的に等級づけされた固定秩序および偏狭な地域という観念もこの影響をうけ、動揺して落ち着くことがなかった。このような状況の下では、神というものの説得力もいささか迫力を欠いた。

そこで、物質的な生産手段を掌握すると同時に、差し迫って精神的な生産手段の掌握をも要求する統治階級—専制君主ならびにその官僚達は苦心慘澹して、何とか新しい精神統治の手段を探し出そうとしたのである。しかし、地主経済によく合った専制官僚政治形態と丁度同じように、これはとても咄嗟に思い付くといった代物でもないし、また、たとえ思いついたとしてももうまくいくとは限らない。このような政治経済によく合った天道観念の政治思想は、旧い封建秩序が崩壊する過程で出現してきたものであったが、これが指導思想として選択されたということについては、やはり一定の模索過程を経なければならなかったのである。

秦が後世の儒者に異常なまでに厳しい口調で責められた所以は、秦の始皇帝が6国を統一し、これまでにのべてきたような制度の大改革を行ったとき、こういった統治方式は始めてだったし、経験もなかったので、統治上非常に不利なこと、つまり史家のいう焚書坑儒をやったためである。秦の始皇帝は、丁度ローマ帝国が紀元後のはじめ頃、キリスト教が奴隷帝国の統治に極めて有益だということについてすぐれた経験をもたなかったために、さまざま手を尽くして事前に禁圧、迫害を行ったと同じように、儒家やその学説が自分の統治に最も有益だということについて、切実に身をもって感じなかったわけである。しかし、「利益は終には会わずや人をして智慧をえさしむる」。ローマは4世紀になって、これまでデマで人々の不安をかきたて、権力者を誹謗するものとばかり考えられてきたキリスト教を国教としてきた。中国では専制君主は漢の武帝の時代になって、「百家を罷黜し、儒術を崇尚す」ということになった。

儒教あるいは孔子の学説の出発点は、いわゆる天道観念の政治思想である。社会意識形態の発展史上からみると、天道観念は神道観念に比べ一歩前進している。近代ヨーロッパにおける天道観念あるいは自然主義、ある

はいわゆる玄学といわれるものは、神道あるいは神学に比べてはるかに進んでいるが、わが中国にあっては、古代に出てきた天道観念あるいは玄学は、わずかな進歩をとげたにすぎない。これは、その基礎となっている地主経済が、究極的には資本主義的なものではなく、封建的なものであり、もとの領主経済に対してもわずかに前進しただけのものであるか、あるいは「半ば左向け左」をした程度といったわけのものにしかすぎなかったからである。

儒家の学説が治道に有益な、また専制官僚政治に有益なところは、これを集大成した孔子が力説した大一統主義にあるということは、大方の知るところであるが、大一統主義と密接な関連にある三綱五常の教義は、それ以上に専制官僚政治化の不可欠の至宝だということは、すでに幾千年の歴史的经验の証明するところである。しかし、大一統主義にせよ、三綱五常の教義にせよ、これらの依拠すべき支柱は天道観念であり、天道観念の「一を以て之を貫く」ということによっているのである。筆者は、孔子の学説には3つの部分が含まれていると考える。1つは天道観念の政治思想であり、1つは大一統主義であり、今一つは三綱五常の教義である⁽¹⁾。前者は出発点であり、後の2つはその応用、あるいはその展開であると考えられる。

周知のように、孔子は「神」についてはそれほど論じていないし、「鬼」については触れようとしなかった。孔子は、「天」について論ずることを最も好んでいた。しかし、儒家あるいは孔子の教義の中における「天」は、近代ヨーロッパの啓蒙学者が宣伝に努めた自然主義よりも、もっと神性をおびている。いわゆる「天道福善にして禍淫なり」（書経湯誥）とか、いわゆる「皇は上帝矣らん。下に臨みて赫有り。四方を監観し、民之莫たるを求む」（詩経大雅）といったこと、こういった下りは、さだかならざる深遠な世界の中で吉凶禍福をつかさどる人格をもつ神が、ここを支配しているということを表わしている。しかし同時にそこには、政治的意味も極めて色濃くこめられている。例えば、いわゆる「天は民を生み、而して之

(1) 拙著「中国官僚政治研究」、96頁参照。

の君を樹つ。以て之を利する也」(左伝文公13年)とか、いわゆる「天は下民を佑け、之に君を作り、之に師を作る。惟だ其の克く上帝を相けて、四方を寵綏す」(書経泰誓)、とか、あるいは「天子は民の父母を作る。以て天下の王と為す」(書経洪範)などの下りは、「天」あるいは「上帝」はさだかならざる深遠な世界の支配者ではあるが、決して自分ではその意志を実行することができないため、それを実行する場合には必ず天子、あるいは帝王の手を借りて実行しなければならない、こういったことを明らかにしている。

そこで、帝王あるいは天子のなす行為は、取りも直さず、いわゆる「天功の人が其れ之に代わるなり」ということになる。通俗的な言葉でいえば、「天に替わって道を行う」ということになる。天に替わって道を行うという仕事はあまりにも大変で、天子一人ではとても無理だということで、当然に下級・高級官吏の補佐が必要となってくる。だから、この補佐の地位も天子の地位と同様に神秘化されなければならない、同様に「玄のまた玄」という先天の存在に依拠しなければならない。しかし、儒家の創立者、祖述者である孔子、孟子はいずれも、このことにかんじてかつてとくに明白にのべたことはない。

それから漢の武帝の時代になって、百家罷黜と儒術崇尚を主張した董仲舒がはじめて、その大著「春秋繁露」の中で「官制は天を象どる」ということについて言及、起草している。彼の「妙論」の帰結は、「天は四時之選と十二節とを以て相和し、而して歳を成就す。王は四位之選と十二臣を以て相砥礪し、而して極を致す」、ということである。「周官」の中にあつては、天地春夏秋冬はすでにきちんと配列されており、人にどのような高官の官名をきいても、すぐに官と做し、位にある人は皆先天の配置から出ているのだということと連想させるということになっているのだが、董仲舒がもっともらしい理屈をつけたように、王者並びに大臣たちの政治的措置とか、「慶賞刑罰」とかいったことは、「春夏秋冬の異気」を体得しており、したがって、「天之行う所を以て政と為すに副う」ということになる

わけである。

この天の定めた秩序の政治的観点から出発して、大一統の教義を引き出すことは極めて容易なことである。董仲舒のいう「王者は天に配す」とか、「天に2日無く、民に2王無し」とかいうことからすると、王者あるいは天子は天下の最高主権者である。孔子の大一統主義と、この大一統主義にもとづいて提起した「尊王」の実践的主張は、中央集権的専制君主およびその官僚の立場からは、当然に「正中下懷」（自分の意中に合う）の高見ということになる。

しかし結局、そこにはつぎのような欠点が存在している。その欠点とは統治者が天意天命を強調する点である。自分がその地位あるいは職にあるのは、天がこれを与え、民がこれに従うということで、その統治に反対する輩も、このとらえがたい深奥な理によらなければならないということ、統治に反対する輩が、これまでの統治に反逆しようとする場合にも、天の授命によるのだという点である。さらにまた、「天命を取らねば、反つて其の殃を受く」ということを、強調しなければならないことにもなる。

事実、歴代の王朝の開国者は、たいていの場合、自己を「真命の天子」として描いている。いつも迫られてやむをえず、「天乎応じ、而して人乎順じ」、天子の座についたのだといった具合に描くのである。彼等は目的を達するや、反逆を行ったときに唱えた大議論をわきの方へうっちゃって、「春秋の大一統者天地之常経にして、古今之通誼なり」ということを、声高にもち出す。しかし、夫子の道によって夫子の欠点を改めなおしたところで、これで欠点が十全に補われたということではできない。幸にも、儒家の学説の中には第3の重要なものがある。それはすなわち、大一統主義と相互に影響を及ぼし合っている綱常の教義である。

君が臣の綱となるのは天の定めた秩序であり、父が子の綱となり、夫が妻の綱となるのも天の定めた秩序である。こうなると、自然の大法は、まことに天綱は大にして天子から庶民にいたるまで、すべて入らないものはないといったようなことになる。しかし、実際ここには、以下のように「治

道」にかかわる重要な鍵が存在するのである。

父が子の綱となり、夫が妻の綱となるということは、すでに君権、父権、夫権をはっきりと確定しているということである。したがってまた、父権や夫権は君権に従属するということである。わが国ではずっと、「国の本は家に在り」、「家齊つて而る後に国治まる」ということを強調してきた。積極面からこれをのべると、「君主之親に事うるは孝、故に忠は君に移す可し。兄に事うるは悌、故に順は長に移す可し。家に居りては理、故に治は官に移す可し」（孝経廣揚名）ということである。また、これを消極面からのべるとつぎのような効果をもつ。「其の人と為り也孝悌に而て、上を犯す者は鮮し。上を犯すを好ま不而て乱を作するを好む者は、未だ之有らざるなり」（論語学而）である。

このことからわかるように、儒家の述べる「家齊りて」というのは、「国治まる」ということの為である。また、そのいうところの父権や夫権は君権の為のものである。家族関係は全く政治関係として取り扱われている。したがって孔子からみると、家がうまくおさまって、不幸な子、道理をわきまえない妻、不逞の兄弟、こういったものがいなくなるということは、国家のために一定の政治的任務を完成したということになるのである。いわゆる「孝乎惟れ孝、兄弟於友、有政於施す、是も亦政を為る也。奚ぞ其れ政を為すことを為さん也」（論語為政）ということ、このことの意味はつまり、家にあつては父母に孝順、兄弟友愛ということは政治的役割をもち、政治にたずさわるということに等しいということではあるが、必ずしも政治的舞台に立たねばならないということの意味するものでないということである。一方で家族を政治化し、他方で政治を家族化すること、国と家とを一体のものとする、このことこそ倫理の政治的の神髄である。

しかし、儒家の学説のいうこのような倫理の政治的主張は、貴族にあつては「子民に分土」し、ピラミッド型の等級制度、小国寡民とかいったことによつて、幾重にも縛りつけた状況の下においては、何もことさら必要はない。一度官僚政治が出現するや、王者あるいは天子は高くとまつて、

領内の広域にわたる領民に対しては、単に郡守、県令の取り締まりに依存するという状況であった。これでは実際には、細かいところまで行きとどくということなど期しがたい。そこで最も妥当な線としては、家族、宗教を通じて取り仕切るのにこしたことはない、すなわち、「上を犯し乱を作する」のを防止する責任を、父としての存在、夫としての存在、族長や家長としての存在といった、家庭あるいは族姓関係を通じてそれぞれ分担させ、家族と政治の連帯した責任という形を打ち立てたのである。

「勸」の場合にはすべて、「一人成仏すれば、鶏犬も皆仙たり」ということになるのであり、「懲」の場合にはすべて、「一人法を犯せば、九族株連す」ということになるのである。このことは結果としてみれば、父が子をいさめ、妻が夫を励まし、兄弟朋友互に戒め合うということは、皆が現状におさまり、現状の下において「長進」（学問や徳をつむこと）、安富尊榮（富に安らかにして、榮を尊くす）を求め、このことによって、天下太平となるというにほかならない。太平の大一統の状態は、「天地に君子生じ、君子天地を理む」（荀子王制篇）ということの結果である。したがって、この学説の出たのは決して偶然というわけではなく、領主的貴族政治が分解し、地主的な官僚政治が漸次形成される過程で出てきたといえるのである。

天道政治の観念、大一統主義、綱常の教という、儒家の学説の三本の柱となっているもの、これらは漢代の専制君主およびその官僚たちの評価、重視するところとなり、さらにこれらが文教政策の指導原則として確定されるや、歴代の専制王朝はいずれも、崇儒尊孔、「庠序之教を謹み、之を申しむるに孝悌之義を以てす」といったことを、自らの封建専制官僚統治を一体的に結合、維持していくための国策としていったのであった。孔子の思想が封建専制官僚統治の中で徹底して貫かれ、ずっとつづくといった状態は、事実信じ難いまでに達していたのである。明代の李卓吾はこれを嘆いてつぎのように言っている。「中国2千年に思想無きは、思想無きに非ざる也。孔子の思想を以て思想と為すがためなり。2千年に是非無きは、

是非無きに非ざる也。孔子の是非を以て是非と為すが為なり」と。

孔子の学説が中国の統治思想となっていく長い過程の中で、確かにさまざまな変化をとげてきたということは明白なことである。その事情は、この基礎となっている地主経済形態、さらにそういった経済形態に相對應した中央専制官僚政治が、少なからざる変化を蒙ったのと正に同一である。しかし、さまざまな変化はあったにしても、地主経済、専制官僚統治が存在するという基本的状況の下にあって、天道観念を起点として大一統を強調し、綱常の教を強調することになるというのは、論理上ほぼ逆らえない要求となるということから、根底的な点からの逸脱はなかったといえるのである。

さらに、筆者がこれまでに述べてきた、地主経済の基礎の上に打ち立てられた専制官僚政治という点に立ち返ってみると、これが地主経済の一体的な結合、維持のために大いに助けとなったと同様に、孔子の学説は、専制官僚政治に対して、従ってまた地主経済に対して、これを強固にし、もちこたえさせていく上で肝心な点において、少なからざる促進作用を果たしたのである。この点については、これと関連して中国社会の長期停滞の問題を議論するときに再度触れたいと思う。ここでさらに引き続き議論を進めなければならない点は、このような政治、経済および思想的条件の下において、中国の民族発生の問題をどのように取り扱ったらよいかという問題であろう。

五 地主経済と民族発生の問題

中国の史学界において、民族発生の問題が問題となったのは、2つの事情のためだったと考えられる。第1の事情は、我々が議論の基礎とする理論と、考察しなければならない現実とをつき合わせてみると、いささか矛盾する所があったという事情による。スターリンの經典の示すところによると、「封建制度が解体して資本主義が発展してゆく過程は、同時に人々を民族に構成してゆく過程である。⁽¹⁾」、ということである。これをうける

(1) スターリン、平沢三郎訳「マルクス主義と民族問題・他10篇」、国民文庫社、1953年、59頁。

と、中国の封建制度は解放前まではまだ消滅していなかったか、あるいは消滅の過程にあったわけであるから、近代以前、アヘン戦争以前に、わが中華民族が発生していたということを想定できるかどうか、この問題がある。しかし他面、スターリンの民族にかんする定義、あるいは定義によって示されたいくつかの特徴ということからすれば、それよりもはるかに以前の中国の人民生活の中に、すでに少なからざる痕跡が明らかにみうけられる。

しかし、第2の事情はスターリンの示した民族形成の過程にかんするもので、スターリンが与えた厳密な科学的定義としての「民族」、すなわち、「言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体⁽²⁾」という点である。もしも、スターリンの民族の定義に基づくならば、我々は、スターリンのいう民族形成の時代には、歴史的制約性があるということを認めなければならない。もしも、我々が、古代のゲルマン人やローマ人を、ゲルマン「民族」、ローマ「民族」と呼ぶのをよく歴史書でみかけるように、そういったいわば広汎な言い方をするとすれば、この意味における民族の発生とか出現といったことは、スターリンの言うのとは別の事になり、当然何も必ずしも、スターリンが厳密に限定した歴史的時期ということによる必要はないということになる。この場合スターリン自身も、「社会民主党は民族問題をどう理解するか」という論文のなかで、これには「封建君主主義的〈民族主義〉⁽³⁾」という言葉を使っているのである。

レーニンがかつてのべた「ナポレオンの帝国主義⁽⁴⁾」というのも、明らかに極めて広汎な意味においてのべたものであった。しかし、レーニンが現代帝国主義に対して厳密な科学的定義をしてから以後、レーニンのこの定

(2) 同上邦訳書、50頁。

(3) スターリン、スターリン全集刊行会訳「社会民主党は民族問題をどう理解するか」、邦訳スターリン全集、第1巻、大月書店刊、1954年、51頁。

(4) レーニン、マルクス＝レーニン主義研究所訳「ユニウスの小冊子について」、邦訳レーニン全集、第22巻、大月書店刊、1965年、353頁。

義に基づいて帝国主義の形成過程を議論するというのであれば、レーニンが明確に規定した帝国主義というのは、資本主義の発展の基礎の上に出て来たものだという歴史的制約性をベースにするほかはない。さもなくば、話が通らないようになってしまう。

上にのべてきた2つの事情を合わせ考えるに、やはり問題は中国の地主経済自体と、そのような経済を基礎として出てくる社会、政治、文化、思想などの面で、かなりちがったイメージに映るような、必ずしもはっきりしない形跡があるということであろう。この点、一方からみると、スターリンの示した民族の諸特徴に若干符合するところもあるし、又別の面からみると、同じカテゴリーに入れることもできないようにも思われる。

以下この点について、別々に説明していくことにしよう。

先ず領主経済と比べて、地主経済にはつぎのような特徴がある。それは、かなり大幅な労働生産力の発展を許す余地がその中に存在すること、さらに労働生産物が相当流通過程に入っていくのを許容する余地が存在すること、このことをうけて、経済活動と文化活動において、人民はかなり頻繁、緊密、かつより広範な交流、接触を行うようになることである。地主経済の制度の下においては、土地は自由に売買可能で、農民もそれほど特定の土地にびっちり縛りつける必要はない。中国の西周時代とか、あるいはヨーロッパ中世の農奴のように、移転は土地につれてのみというのとは異なる。

土地を小作する農民は、自分の土地の生産物のかなりの部分を、地主あるいは土地所有者に小作料として納める。土地所有者と自作農は各々、取得した地租とか収穫物を、課税という名目で地方政府に上納する。地方政府はこういった貢納物を、その地方で換金処分するとか、あるいは国庫に転送するとかして、また各々政府の各部門とか、各地方の経費にあてるわけである。この関連のもの形が不断のうちに大転換をとげることによって、社会的な農業労働の剰余生産物の相当部分が商品化されるにいたった。農業労働の生産力は、もとより専制官僚政府の勸工務農興水利によつ

て高まったが、同時に専制君主、高級・下級官吏、その末端の大小地主の消費に対する欲望も、商品の流通につれて増大してきた。この結果、だんだんと労働の剰余生産物のうち商品化される割合は大きくなっていった。

そこで、さまざまな王朝毎にそれぞれ、それなりの消費都市が少なからず出現したのである。商業資本と高利貸資本は、もともとそれほど地域に縛られることを欲するものではない。そして、商業資本や高利貸資本と「相通ずる之雅」をもつ地主官僚政権は、また、これらを助けて局面を切り開き、交流を広げていったのである。さらに、天下を統一するということが、例えば、「遠人を柔らげ、諸侯を懐かしむ」とか、「弗庭を四征す」とかいった面ですさまざまな努力をしなければならなかったということ、このことは各地の人民生活の様式とか、生産様式とかいったことから、風俗、習慣、言語、文学、社会意識に到るまで、実に少なからず伝播交流作用を果たしてきた。いわゆる「天下に車は同軌、書は同文、行は同倫」とか、いわゆる「声教の暨ぶ所、朔南無し」とか、いわゆる「文明華胄」とか、「上国衣冠」などといったことは、すべて中国人民の長期にわたる生活が地主経済を基礎とし、また専制官僚統治の下で、儒教の影響が長期にわたって滲透していき、ずっと早くからすでにこのような共通の特徴で表現されるようになった事情を物語っている。彼等は黄河および揚子江の南北の共同地域に住み、一般に不自由なく通ずる共通の言語を用い、大体似たり寄ったりの小農の経済生活を営んでいた。しかも、倫理による政治の「治化」は、分に安んじ己を守るとか、天命に従うとか、あるいはこういったことに対応した保守的な共同心理をつくりあげていった。

彼等はすでに「人々の堅固な共同体」を形成していたのであろうか。一見したところでは、そのような気もする。というのは、彼等は皆住めば都というわけで、できればむしろ「其業を世守す」とか、「死を効するも去ること勿れ」といった気風にあったからである。その対外関係について言えば、秦、漢までとは言わないまでも、少なくとも唐、宋の時代には、すでに漢族の人民は自分達と他の民族を対比して、周囲の遅れた部族とか、

あるいはいわゆる異族に対して優越感を形成していた。よしんば、異族に奴隷化されたり、抑圧されたりした場合にも、依然として「礼義之邦」、あるいは「文明上国」の人間であるということを負っていた。近代に接近するにつれて愈々、例えば明末から清初にかけては、漢民族の思想はますます明瞭に色濃くなっていくように思われる。このようにさまざまな面から考えて、中華民族⁽⁵⁾というのが、アヘン戦争の時になってはじめて形成されるとか、あるいは出現するとかいった如きは、いささか事実と合致しないように思われる。

しかし、さらに分析、考察を進めると、これらの兆候なり、形跡なりには、ある程度広い意味で民族的要素といったものが、ほぼ具わっていたということだけは確かにいえる。スターリンの民族の定義による規定とは、異なったものになってしまうことになる。我々漢民族は数千年来、ほぼ中原を基地とする地域に定住し、さらに東西南北に広がっていった。言葉も全く同一というわけではないが、大体通用する。したがって、これは近代の民族の概念とは掛け離れているが、逆に近代の民族にとって重要な共通の経済生活と共通の心理的要素といったものとは、極めて深いかわり合いをもっている。このようにいうと、上にのべてきたことと丁度反対になるということにならないであろうか。そうはならない。

確かに地主経済は、中国の封建時代の社会経済生活をより活力あるものにし、より広がりのあるものにしていった。しかし、中国の地主経済の性格は所詮封建的なものといえ、近代になってから出てきた資本主義的地主経済とは、かなり異なったものといえる。地主経済は若干の政治的な性格をもつ消費的商業都市が成長してくるのを許容もするし、またその成長を必要ともする。しかし、官僚、地主と結託した豪商達は、はじめから農工業生産を支配、侵食し、これら生産物に合理的な価格をつけて、ある程度理にかなった利潤をあげさせるということはさせなかった。さらに、封建社会に広く行われていたようなさまざまな経済外的搾取は、このような状況

(5) ここでは、中華民族とは漢民族を主体とした民族を指すものとする。

をさらに酷しいものにしていった。

このような経済的基礎は、前近代的資本（商業資本、高利貸資本）所有者のような「ブルジョア階級」の発生にのみかなうだけであって、近代的タイプのブルジョア階級なり、市民階級なりには、本質的に許容されるものではなかった。したがって、国家統一の要求なり、異民族の反抗に対して、ふつふつとわきあがってくる愛国なり、民族愛の要求がなかったとはいえないが、これは、近代ブルジョア階級が市場を守るためとか、市場を安定させるためとか、市場を開拓するためになした、封建的割拠に反対するための、また、ブルジョア階級の民族解放闘争を闘い取るための闘争とは、所詮異なった歴史的情况の下に提起された、異なった性格かつ異なった内容のものだったといえる。

つまり、スターリンの民族の定義に沿っていわれる共通の経済生活、共通の心理といった要素は、任意の何らかの共通の経済とか心理とかいったものだったのではなく、ブルジョア階級の実体に合致した共通の経済、共通の心理だったのである。したがってそれは、「一郷に住し、一幫に打在す」ということとはちがう。歴代の政治的な大動乱は、すべてこの経済的基礎—工業と農業の結合体といった形の「人々の堅固な結合体」を、動揺させたことはなかったのである。かくて、共通の地域で、共通の言語をつかうという特定の歴史的時期にあつては、統治される人民のすべて一致した願望を表わす確固とした社会集団は、ブルジョア階級によって代表されるということになる。

これまでのにべてきたことから、中華民族発生の問題について、筆者はつぎのような見方をとる。

- (1) 広い意味では、中華民族は近代のアヘン戦争のはるか以前、ヨーロッパの資本主義が侵入してくるはるか以前に、すでに異民族の征服、統治、異民族による被征服、統治をくりかえすことによって、「華夏神明之胄」とか、あるいは華夷之辨を形成していたということ、明らかにすることができる。この内部の構成は不断に増減変化したであろうけれども、

中華民族はこのような悠久の文化、歴史をそなえもち、勤勉かつ知力にすぐれ、ほぼ似通った経済、思想生活を経てきた人民を擁していたことから、封建時代にもある種の、前資本主義的ながら、不断に発展してきた「民族意識」が存在していたということは、何も理不尽なことという⁽⁶⁾こともいえない。

- (2) しかし、スターリンが明確に限定した近代民族概念を、中国の前資本主義的な民族の形態に適用していくのは、理論上難しい。事実、中国社会における地主経済、およびこの上に打ち立てられた政治、文化などの施設は、所詮すべて封建的なものであったから、近代的なブルジョア階級の民族主義的意識を育てることはできなかったのである。ある社会の中で育まれてきた新しい生産様式の他の条件が具わってきたとき、近代的な民族意識と関連をもつ自然哲学、あるいはいわゆる天道観念は、ヨーロッパの16世紀、17世紀におけると同じように、自然科学と結びついて、科学的自然主義となりうる。新しい生産様式の他の条件が具わっていない時には、低級、あるいはまた神性を帯びた天道観念は、儒家の天道観念がそうであったと同じように、突然の災難とか吉凶禍福を予知する讖緯学と結びついて、迷信とか宿命とかいったものにずっと近いようなものになってしまうしかない。近代の民族意識の中における他の要素についても、同様に、資本主義生産様式と関連する他の社会歴史条件を組み合わせるということではなければならない。

六 地主経済と中国社会の長期停滞の問題

中国社会の長期停滞の問題は、かつて対日抗戦期間中、日本軍閥の秘蔵子「学者」秋澤修二が、自著「東洋哲学史」および「支那社会構成」の2

(6) マルクスやエンゲルスは、「資本論」、「家族、私有財産および国家の起源」およびその他の著述の中で、資本主義以前の社会における各々の国民とか、大氏族の結びつきということの存在について触れるときにも、屢々「民族」とか「諸民族」といった用語の使い方をしている。

著の中で、中国の歴史を歪曲し、日本統治者の侵略主義的な宣伝に合うようもっていこうとして、「中国社会のアジア的停滞」について繰り返し論証を試み、中国論壇の各方面からの反駁と論争を呼んだところである。筆者は、拙著「中国官僚政治研究」における「中国社会の長期停滞に及ぼす官僚政治の影響」と題する一章の中で、この問題について一つ一つ論点を列挙しながら、全面的に総合的論述を行った。この中では、官僚政治の角度から中国社会の長期停滞の問題を見てきたのであるが、筆者の論旨は、中国の専制官僚政治は地主経済の上部構造として出てきたものだということなのであった。今ここで筆者が、地主経済の角度から中国社会の長期停滞の問題を考察するとき、両者に密接な内在的関係があるのは理の当然であろう。

中国社会の長期停滞の問題は、ヨーロッパ各国の社会の発展の情況に比べて、相対的な問題として提起されたものである。西周の建国の初（紀元前1122年）から解放前にいたるまで、中国は3千年以上もずっと封建制の段階にあったのである。ヨーロッパの封建制は5世紀に始まり17世紀から18世紀に終わるから、前後千五百年にも達しない。つまり、中国はヨーロッパに比べて、封建制の段階が倍以上も延々とつづいたということになるわけである（学者の中には、中国の封建制は春秋戦国に始まったと考える者もあるし、極端な場合には漢代はまだ奴隷制であったという者もいる。このようにみると、当然ながら長期停滞の問題などさらさらしない。しかし、やはり筆者は、問題がそんなに簡単に解決するなどとは信じない）。

しかし、これまでの説明では、中国の領主経済封建制は秦代に消滅し、地主経済封建制がこれにとって代わったということであった。中国の領主経済封建制は、西周から春秋戦国にわたるとしたとしても8百年にすぎなく、ヨーロッパ諸国における領主経済封建制は、5世紀にはじまって15世紀に崩壊しはじめるから、全体として前後1千年に達する。したがって、ヨーロッパ諸国における領主経済封建制は、中国のこの段階にあった期間よりもやはり2百年長いということになる。ここから、中国社会の長期停

滞というのは、つまり、地主経済封建制の段階で停滞していたのだということになる。もしこの説のように、地主経済形態が領主経済形態よりもはるかに進んだもので、近代資本主義制度により接近したものだということではなければならないとしたならば、中国は随分と早くこの段階に進んだにもかかわらず、なぜ逆に停滞してしまったのか、このことが問題となる。この問題に対するさまざまな解答、およびいくつかの解答に対する批判については、すでに筆者は、前述の拙著「中国官僚政治研究」の中で、かなり詳細かつ明確に解説してきた。ここでは、停滞が必然的にもたらされる種々の原因を、封建的地主経済の本質からのみ論証するにとどめたいと思う。

先ず、封建的性格の地主経済制度の下においては、土地は最も重要な生産手段であり、土地所有者は社会の権勢をもつ者であった。「有土は斯ち有財」であり、誰であれお金があれば土地を購入し、経済外的搾取者にかわることができ、また、権力をもち勢力をもつ者にかわることができるのである。そこでは、土地生産物は地租化、課税化、商品化されることにより、蓄積された資金あるいは社会の資産はみだりに消費に用いられるのでなければ、土地の購入に使われるとか、あるいは土地の購入と同じように有利か、あるいはもっと有利なような商業とか高利貸業を営むのに用いられるようになったのである。商人、高利貸業者、土地所有者は、ここにおいて「縁戚」ということになったのである。

商業は元来、旧い生産様式を分解するという革命的役割を果たすべきものであり、中国の歴代王朝において、市場をきりひらき、生産物の交換の範囲を拡大していったときには、もとの小農業と家内工業が結合した経済形態や、もとの村落共同体の経済形態に対して、かなりはげしい分解作用を及ぼした。しかし、マルクスは次のように教えている。「この分解過程がどこに行き着くか、すなわち、古い生産様式に代わってどんな新しい生産様式が現われるかということは、商業によってではなく、古い生産様式そのものの性格によって定まる⁽¹⁾」。高利貸業はもともと封建的富に対して

(1) マルクス「資本論」、マルクス＝エンゲルス全集、第25巻、第1分冊、大月書店、1968年、414頁。

も、また封建的な所有権の発生、覆滅と破壊、分裂に対しても作用すべきものである。これは生産手段が分散している中で貨幣財産を集中するのである。しかし、「資本主義的生産様式のそのほかの諸条件が存在するところで、……はじめて、高利貸は、……新たな生産様式の形成手段の1つとして現われるのである」（傍点部分は訳者挿入⁽²⁾）。中国については、マルクスの述べるように、「アジア的な諸形態のもとでは、……経済的衰微と政治的腐敗とのほかにはなにもひき起こすことはない」（傍点部分は訳者改訳⁽³⁾）。というのは、中国においては資本主義的生産様式のそのほかの諸条件が存在しないから、高利貸は、「生産様式を変化させないで寄生虫としてそれに吸いつき、それを困窮させる。」⁽⁴⁾ことになるからである。

次に、中国の地主經濟の基礎の上では、社会の最高の支配者は専制君主であり、専制君主は同時に大地主でもある。さらにまた、専制君主は国内の比較的利益のあげやすい商工業、例えば鉄、塩、茶、米、紙……などを加工する企業の独占者であった。さらに、これら独占者が一般にいかんにかんにかん經營に努めず、独占利潤をあげて、むやみやたらと浪費したかといったことについては、特にとりあげないとして、ここではこれら独占者が独占の過程で、一般の商工業の発展に及ぼした阻害作用は、極めて大なるものであったということだけを指摘しておきたい。

また、別の面からみると、都市の手工業は商業の従属物になり、土地所有権、商業、高利貸業は、高利とそれにともなう権勢によって、あらゆるものに対しておそらく搾取者としての采配を強めていくことができたであろう。こういったあらゆる事情から、工業生産の前途には発展の道とてなく、また、後から与えられる支援とでもなかったのである。そして、直接経済外的搾取をうける農業生産の前途は、工業生産に比べてはるかに悲観的だったのは当然のことである。したがって、封建的地主經濟自身、新し

(2) 同上書、同全集、同巻、第2分冊、1974年、770～771頁。

(3) 同上書、同全集、同巻、同分冊、770頁。

(4) 同上書、同全集、同巻、同分冊、770頁

い生産様式に対して何ら発展に有利な条件を提供しえなかつたし、商業、高利貸業はもとの所有権関係を破壊し、分散していた貨幣財産を集中していったものの、新しい生産様式を形成していく手立てとてなく、古い生産様式をなおさら痛ましい状態に追い込んでいくのほかはなかつた。事実はどうていこれに止まるものではない。

第3は、近代ブルジョア革命は、このような歴史的事実から出てきたものだという点である。すなわち、封建的土地所有者である貴族が政権をにぎり、さまざまな封建的規定によって、農奴をしっかりと土地に縛り付けていたため、都市の商工業者が生産を発展させようとするれば、必ずや農村から労働力を引き出してこなければならないということから、農奴を束縛するさまざまな封建的規定を打ち破らなければならなかつたというわけである。そこで、これらの規定を制定し、実行してきた封建的貴族政権をひっくり返す必要があつたのである。ブルジョア階級と貴族の死ぬか生きるかの真正面からの闘いは、偏にブルジョア階級が剰余労働生産物、あるいは剰余価値を生産するのに役立つ労働力を獲得せんがためだつたのである。

かくて、このような闘争の中にあつて、商工業者—ブルジョア階級は、貴族による奴隷状態から農奴を解放しなければならなかつたのである。彼等は極めて容易に農奴、あるいは農民の助けを獲得しえたわけである。同時に都市でも、ギルド組織に縛りつけられた手工業者が、そのような抑圧から自由になることを要求するようになってきた。このため、ブルジョア革命は、多数の農工労働者、さらにはインテリゲンチヤ、自由業の者までもの参加を、勝ち取ることができたのである。

この反面、中国における地主経済の生産様式自体、先ずもつて地権と商業資本を結託した同一の仲間グループとした。商人が土地所有者となり、土地所有者が商人を兼ねるとか、あるいはさまざまな手工業の仕事場の経営者を兼ねるといったことについては、何ら障害はなかつた。彼等の間には、何ら身分制的な厳格な制約はなかつた。このため、両者の間には、尖

鋭な階級的対立はありえようはずもなかった。両者の関係は、これに止まるものではなかった。封建的土地所有者、専制君主、およびその官僚達の消費とか、欲望の増大から、経済外的収奪、あるいは搾取が強化されたときは、正しく商業、高利貸業が暴利をむさぼり取る絶好の機会でもあったのである。彼等は農民を抑えつけ、苛斂誅求のための「統一戦線」を作り上げたのである。だからこそ、あらゆる王朝の末期ごとに、窮地に追い込まれて決死の行動に出る農民、大衆の反抗の対象は、悪徳役人とか、悪らつなボスの地主とかにとどまらず、商人とか高利貸業者も含まれていたのである。歴代の王朝末期における農民暴動は、王朝を覆しただけにとどまらず、これとともに商業や手工業をも破壊するところとなり、見るも痛ましい悲惨な情況をつくり出すにいたった。

最後に、中国においては数千年来数々の動乱があったが、いつも封建王朝の交代というお馴染みのコースをたどるだけで、新しい生産様式が出てくるといった情況はかつてなかったということ、このことについて触れたいと思う。古い王朝が倒されても、新しい王朝も古い秩序を立て直すだけで、何ら新しい変革を果たしたことはないように思われる。これには必然的な内面的理由があったのであって、如何ともしがたいことだったのである。別の生産様式が新しく生まれかわるべき変革を経て立ち現われてくるのは、新しい階級社会、その新しい生産様式が旧い社会の中ですでに育まれてきているというときだけだからである。

中国の地主経済と官僚政治はすでにのべてきたように、いろいろな制約を設けることによって、新しい生産様式の成長に必要なさまざまな条件を抑えてきた。機に乗じて草沢から身を起こすとか、いずこから出てきたか定かならざるような新しい統治者にとって、客観的基礎から新しい生産様式を構想させるような商工業の現実的基礎はなかったし、よしんばそういった統治者が斬新創意にみちた「雄才大略」をもっていたとしても、基礎なくして成功に到らしめるような、新局面を切り開くことは容易なことではなかったのである。中国がいく度かの異民族の統治をうけてきたことは、

まがうことなき事実であるが、生産様式の上ではやはり、いずれも中国固有のものよりもずっと遅れていたから、王朝はいくつも変わったものの、結局、社会は「静止した状態」の中で、再生産のもとの形態をつづけているといったような情況だった。この点について、王朝が改まるという政治的大変動にもかかわらず、中国の社会的基礎はいささかも揺るがなかったと、マルクスも指摘している。

つまり、中国社会が地主経済の封建段階に長期停滞していた理由というのは、この経済形態自体の中に、新しい生産様式を懐胎し、育成していくことを困難にするような、いくつかの制約がすでに存在していたということ、さらに、このような経済形態を基礎とする官僚政治組織と儒家の学説が、この間に立って加えて多くの矛盾、対立の緩和の措置を用意したということのためである。しかし、中国社会の停滞の問題を議論するとき、我々は断じてこの問題を絶対化すべきではない。中国社会の停滞を論じる場合、それは、中国社会はそう急速に新しい生産様式に変わっていきにくいという、相対的な意味の議論をしているのであって、中国は清の時代になっても、依然として秦や漢の時代の生産技術と文化水準に留まっているのだと容認することなどでは、とうていありえない。事実、中国ではこの長い間に、農耕技術、商工業の組織・規模および経営、また文化・交通・社会生活のいずれの面でも、少なからざる進歩があったのである。ただ、前述したようなさまざまな条件的制約のために、量的な進歩の積み上げにとどまり、質的に大きい変革を十分引き出せないままに終わったといえよう。